

本発表の目的は、ウラジミール・ジャンケレヴィッチ(1903 - 85)の『死』(1966)の「死」の独自性を明らかにすることである。彼によれば、死とは、「人間がその外と同時にその内にいる」(p. 179)ことである。つまり、それがいつかは分からないという「希望」とそれは必ず到来するという「諦めた失望」である。この主張の根底には、死の瞬間は、最後の生の瞬間であることがある。本発表では、以下を論じる。

まず、ジャンケレヴィッチのアンリ・ベルクソン(1859 - 1941)の死の議論に対する批判を取りあげる。彼は、『アンリ・ベルクソン』(1959)でベルクソンの「物質」と「生命」の関係を相互性で考える。「物質」は「生命の部分的中断」である。それゆえ物質は、生命の派生とも言える。一方で「生命」は、自己覚知に物質を必要とする。このようなベルクソンの積極的受容にもかかわらず、彼は、『創造的進化』(1907)の生命主義を批判する。なぜなら、生命主義では生命が個体の生より優先されるからである。しかし、これでは現実の個体の死は軽視されるという問題が残る。この問題を解消するために、ジャンケレヴィッチは、生きることは死ぬことであり、死ぬことは生きることでありと主張する。

次に、ジャンケレヴィッチが、その概念がほかの概念によって定義される死の概念性ではなくて、死の事実性を明らかにしたことを示す。彼が言うように、死は、「私」を無化する。死は死の無である。だが、その無は、神が何かを創造する時の無とは異なる。神の無は、「肥沃な無」であるが、死の無は、「不毛な無」である。死の無は、「私」をただ単に無化するのではない。「私」を虚無化するのである。では、そのような不毛な無化において「私」はこの世界から消滅するだけなのか。そうではない。死の直前まで「私」は生きていたという事実が残るのである。死の事実性とは、死の事実、純粋な死の事実ではなくて死の瞬間まで「私」はたしかに生きていたという生の実事であるということである。

そして、この死の瞬間に着目すれば、死は〈ほとんど - 無〉としての死であることを論じる。なるほど、死は「私」の無化であるが、しかしジャンケレヴィッチは、死の瞬間において何か新しく始まると考えている。「新しい継続の踊り場への通路」が、死の瞬間である。だが、この死の瞬間まで「私」は生きていなければならない。そのためには死にゆく「私」の「勇気」が必要である。なぜなら、それぞれの生は必ず終わるものであるが、同時にこの事実は、死にゆくそれぞれの者の死をほかの誰も引き受けられないということだからである。逆を言えば、生きているそれぞれの者の生をほかの誰も引き受けられないということだからである。

以上より、ジャンケレヴィッチは、死の瞬間に着目することで存在でも無でもない死の両義性を明らかにしたと言える。死の瞬間において死は現在化されるのだが、それは、生きている「私」が消滅することではなくて、過去へと退いていくことなのである。